

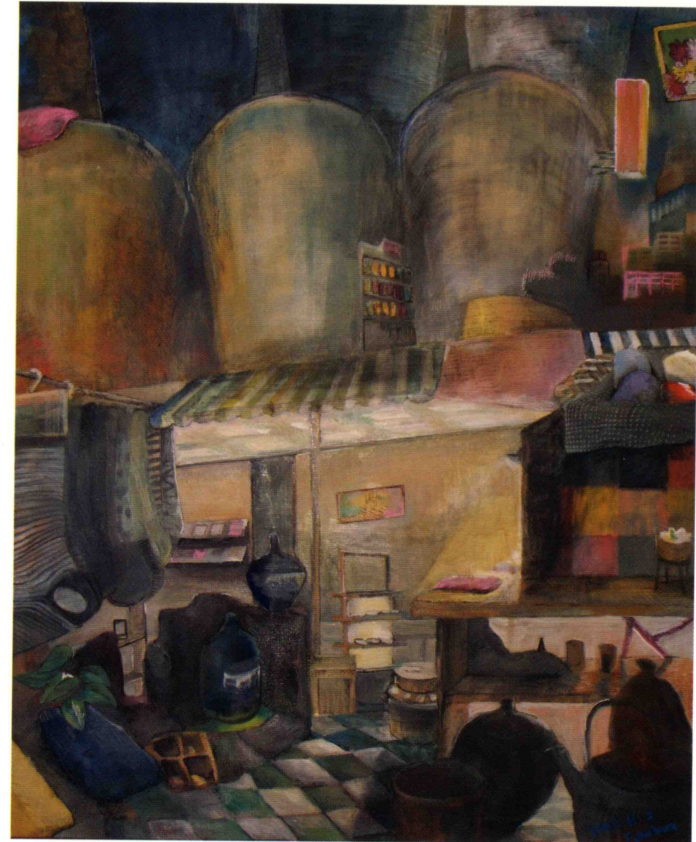
そのくつ下屋さんには、色とりどりのくつ下と、色とりどりの絵があった。

小さい私は時々首をのばして、店の中を歩く。形も生地も色も様々なくつ下、その棚の上に、花や街や四角の描かれた様々な絵。すっきりとした店内だけれど、とても目に豊かで、心がはずむ。絵はお店のオーナーさんの趣味らしい、とお客さんの会話を耳にした。なるほど。私は棚の上に並んだ絵を見て頷いた。

レジの下のガラス棚、赤い花の広がる絵、かごの中のくつ下、これもオーナーさんが作ったらしい、焼きもの。ぐるりと歩いて、店の奥、大きな絵の前で私は立ち止まる。色に溢れた、人がたくさん行き交う街の絵だった。「すてきねえ。」お客さんだろう、私の隣に立ったご婦人が、目を細めてつぶやいた。

ええ、本当に。私は頷く。心がじんわりと明るかった。それは、たとえば春、温かい風が吹いたときのような、冬の朝、空がきれいに晴れたときのような、そういう気もちだった。私は笑って、ひょん、としっぽを振る。

しばらくして、私はお店を出た。ふいにコーヒーの香りがして、私はそちらに足を向けた。



マサヤ 靴下専門の店 福原明里/絵